和合学研究

難　波　征　男

1．張立文の「和合学」成立と，その周辺

（1）21世紀は和の時代であって欲しい。和はその意味に，平和，和解，穏和，柔和，そして単一同一ではなく渾一なる調和，混声の和諧（ハーモニー）や差異の和合を含んでいる。

ニューヨーク多発テロと，それに対する「反テロ」報復戦争は，どちらも世界の平和と和解の祈願を抹殺している。爆撃から逃避するアフガン難民を襲う鋭く硬い地雷爆弾と零下20度の寒冷は，みずみずしい柔和な身心と穏和な家庭生活を破壊している。ところが，報復戦争は「反テロ」を呼号して，さらに戦地を拡大しようとしている。テロと報復戦争の衝突の中で，この危機を回避し世界平和と人類の幸福を求めて，新しい世界人類の「礼（ルール）」の構築が緊急に求められている。

1999年11月，日本人で初めて国連ユネスコ事務局長に選出された松浦晃一郎氏は，その就任演説で，和の価値について論述し，「和を所与のものとしてではなく，到達すべき目標とそこに至るダイナミックなプロセスとして理解すべきではないか」と提唱した（山脇直司「『和』の脱・再構築とグローカルな公共哲学」『UP』351号）。これに呼応した京都フォーラム事務局長・将来世代国際財団理事長の矢崎勝彦氏と将来世代総合研究所所長の金泰昌氏は，2001年8月から9月にかけて合計3回，地球と人類に貢献する「和」についてのシンポジュームを京都で開催した。その第2回目には松浦氏も出席し，第3回目は過去2回の成果を踏まえて，インド・中国・韓国・オーストラリア・ニュージーランドからの参加者を交えて，「第1回グローカル公共哲学京都会議：アジア太平洋地域会議」を京都国際会館で挙行している。東アジアの人々は和の概念をどのように理解し，また他の文明圏にどのような貢献をもたらすこ

とができるかが，そのメイン・トピックスであった。この会議は，インドの哲学者兼政治家のカラン・シン氏の「平和の哲学」から開始されたが，3日間の真剣な討議を経て，特に「平和」と「和解」のプロセスとしての実践的理論構築の面で大きな成果を得，ユネスコと共同で世界平和に向けて努力する意欲と計画を確認して終幕した。

ところが，その8日後の9月11日，同時多発テロに遭遇したのである。誕生したばかりの「和の文化」は，燃えさかる戦火の中へ投げ込まれ，その理論を事上磨錬，実践的闘争を通じて練り上げられることになった。

（2） ところで，これより先の1996年12月，張立文（中国人民大学教授）が，『和合学概論—21世紀文化戦略の構想』上下・1165頁を刊行して，和合学を提唱している。松浦氏が主張した「和に至るダイナミックなプロセス」を解明する貴重な素材を提供したのである。この和合学に注目した将来世代総合研究所は，2000年12月に北京で，中国哲学者や政治思想家を結集して「和」についてのシンポジュームを主催している。張立文教授は，それに向けて「和合学要綱」を提出した。この長文レジュメによれば，和合学提唱の目的は次のようなものである。

> 和合学は，伝統的な和合思想や理念にもとづき，今日人類が直面している人間と自然の生態的危機，人間と社会の間の社会的危機，人と人との間の道徳的危機，人間の精神的危機及び相異なる文明間の価値観の危機に対して深く考慮することで，その和合的な価値観が現代社会に相応しい基本哲学と価値原理へと再構築され，人類文化の危機の解決につながることを望むものである。すなわち，和合学の理念は，上に示した人類が抱える5つの衝突と危機を解決する一種の理論形態として，時代の要請と時代精神をあらわしたものである。
>
> （「和合学綱要」3　和合三世界の構築）

張立文によれば，和合学提唱の目的は，人類が直面している五大衝突の危機，即ち①生態的危機（人と自然の衝突）②社会的危機（民族・種族の分裂，戦争，貧富の差の拡大，毒薬や売春，テロリズム等の人と社会の衝突）③道徳的危機

(道徳紊乱，人間関係の隔絶等の人と人との衝突) ④精神的危機 (孤独，苦悶，希望喪失等のこころ〈心霊〉の衝突) ⑤文明の衝突危機 (各文明観の価値観念や思惟様式等の衝突)を回避し解決するための理論構築である。そして彼は,「人類が共に直面している五大衝突と危機は，東アジアでも例外なく直面している。もしこの五大衝突と危機が有効的に解消できなければ，人類には破滅しかない。その意味で，これを解消できるか否か，また如何にしてこれを解消するかということが今日求められている最重要課題であり，時代の呼びかけである」(同上)と述べ,「人類が直面している衝突と危機を解消する和合の五大中心原理」を提起している。五大中心原理とは「和生」「和処」「和立」「和達」「和愛」であるが，これらは和合学から独創された新説の理念であると言えるであろう。

(3) 和合学は，張立文の独創的な学問体系である。ところが，和合学を張立文が世に提唱したのと時期を同じくして，和合学を迎える中国社会の中に張立文には予想だにしなかった和合文化ブームが発生した。ブームには浮き沈みがある。まして政治的経済的要求によって仕組まれた文化的ブームは，文化独自の主体性が希薄である。和合学も和合文化ブームの浮沈と運命をともにする危険に遭遇したのである。

90年代の中国は，社会主義経済から世界市場経済へ路線を大きく旋回する。改革開放路線である。この路線を展開するためには，外では中国市場を世界へ開き，内では中国のアイデンティティーを再確認する必要が生じた。中国当局は中国アイデンティティーを伝統文化に探求し,「中国伝統文化の精粋は和合文化」と認定して，和合文化の一大キャンペーンを展開したのである。幸か不幸か，張立文の儒学研究胎内で長期間にわたって育成されてきた和合学は，この和合文化ブームの中で呱々の声をあげたのである。

国家当局による和合文化キャンペーンに対しては，賛否両論が渦巻く。張立文の和合学は，この和合文化キャンペーンに加担するものとか，国家の宣伝する和合文化と同類のものと誤解されて，一時的な和合文化ブームの歴史的渦巻きに翻弄される危険にさらされていた。

実は，中国国外の日本に生活していて和合文化ブームの埒外にいる私が，張立文の和合学を研究してみよう考えた動機の１つは，ここにあった。

（4）張立文は，中国古典思想の中を貫流する固有の論理構造を研究してきた。その論理構造が中国思想独自のものであって，中国が国是とするマルクス主義を含む西洋思想の論理構造とは異質なものであることを，その研究結果として確信しているようである。

> 中国哲学の論理構造は，できあいの原則や原理から出発するものでも，西欧固有のモデルを踏襲するものでも，都合次第で既成の原則や原理に適合させていくものでもなく，中国哲学の実際から出発し，中国哲学固有の原則や原理へと整理し結論づけていくものなのです。
>
> （「私の宋明理学研究」土田健次郎訳）

> 各民族にはその民族独自の理論や思惟が必要である。理論や思惟をもたない民族は，最終的には理論や思惟をもっている民族に吸収されるか入れ替られるであろう。
>
> （『中国哲学邏輯結構論』引論　難波訳）

張立文はここで，それぞれの地域や民族・国家には，それぞれの思想や哲学があると，中国民族文化のルネッサンスを呼びかけ，欧米文化一元主義に対抗して文化多元主義を主張している。外来文化の仏教が圧倒的影響力をもって流行していた宋代，仏教批判の朱子学が成立し受容された事件は，中国民族文化のルネッサンスであった。張立文が，朱子学をはじめとする宋明儒学を主要な研究対象とする理由については，次のように説明している。

> 当時，仏教論理は外来思想の論理であった。その外来文化が行き詰まってきた段階で，宋明儒学者は中国伝統文化に回帰して，そこから当時の歴史的課題に挑戦して，それを打開できる思想を創造したのである。
>
> （「21世紀の中国哲学　張立文の和合学」『福岡女学院大学紀要』第9号所収）

張立文の朱子学研究の目的は，外来の仏教思想を克服して成立した朱子学に中国ルネッサンスの奥義を学ぶことであった。それを活用して現代の欧米文化一元主義を克服し，さらに現代の地球と人類が直面している五大衝突や

危機に対するユニークな打開策を，中国思想独自の世界観と方法論によって発明し，解消の道を探求することだったのではなかろうか。そのような期待と使命を担って形成された21世紀の中国哲学が，和合学である。

和合学に集約されていく張立文の中国哲学研究は，論理構造論だけではない。かつて私は，その概要を「中国伝統思想と現代」(『福岡女学院短期大学紀要』第31号）で紹介したが，参考のためここに著書のみを再録しておく。

1．易学思想の研究

『周易思想研究』(湖北人民出版社　1980)

『周易帛書今注今釈』(学生書局　1991)

『周易与儒道墨』(東大図書公司　1991)

『帛書周易註釈』(中州古籍出版社　1992)

2．宋明儒学の研究

『朱熹思想研究』(中国社会科学出版社　1981)

『宋明理学研究』(中国人民大学出版社　1985)

『戴震』(東大図書公司　1991)

『走向心学之路—陸象山思想的足跡』(中華書局　1992)

『宋明理学邏輯結構的演化』(萬巻楼　1993)

3．中国哲学論理構造論の研究

『中国哲学範疇発展史（天道篇)』(中国人民大学出版社　1988)

『中国哲学範疇発展史（人道篇)』(中国人民大学出版社　1995)

『中国哲学邏輯結構論—中国文化哲学発微』(中国社会科学出版社　1989)

『(中国哲学範疇精粋叢書）道・気・理・心』(中国人民大学出版社・主篇)

4．伝統学の研究

『伝統学引論—中国伝統文化的多維反思』(中国人民大学出版社　1989)

5．新しい人間学の研究

『新人学導論—中国伝統人学的省察』(職工教育出版社　1989)

『新人学導論』(広東人民出版社　2000)

6．中国近代新学の研究

『中国近代新学的展開』（東大図書公司　1991）

7．李退渓思想の研究

『退渓書節要』（中国人民大学出版社　1989）

『李退渓思想研究』（東方出版社　1997）

8．和合学の研究

『和合学概論―21世紀文化戦略的構想』（首都師範大学出版社　1996）

中国社会科学院の李甦平教授は，「哲学家―張立文」（『中国人民大学紀要』1991）の中で，張立文の学問を(1)宋明儒学研究，(2)中国哲学論理構造論研究，(3)易学思想研究，(4)朝鮮の李退渓学研究，(5)その他（伝統学の構築，新しい人間学探究，和合学の創築）に分類整理している。この紹介文が書かれてから数年を経て，和合学が完成した。

和合学は張立文哲学の集大成である。「五大衝突と危機が有効的に解消できなければ，人類には破滅しかない」，これが張立文の現状認識であるが，「五大危機の解消」が張立文の祈願であり，和合学の目的である。張立文の研究活動は，この目的を達成するためであった。張立文の思想研究範囲は，儒学の中核的経書である『易経』の研究，宋明儒学思想（朱子学・陽明学＝新儒教）の研究，それに欧米文化支配の近代化に挑戦する現代新儒家の研究，及びマルクス主義哲学等の西洋哲学の研究に及んでいる。それらに対する研究姿勢は，仏教という外来文化を超克した朱子学の研究から出発している点に端的に表明されている。現実の政治的経済的文化的病弊は，欧米文化の支配による近代化に淵源があり，これを根本的に超克しなければならない。朱子学研究から出発し宋明儒学の研究，近代化の中での中国古典思想の研究，更に現代新儒家の研究を経て，伝統学と現代との関係や新しい人間学を探究する研究路程は，やがて和合学に帰着し集大成されたのである。それは，かつて朱子学者や陽明学者が実践した経世済民，修己治人の伝統を現代的に継承した21世紀の中国哲学者による「盛徳大業」（『易経』繫辞伝上）の実践であると言えるであろう。

張立文の宋明儒学研究には，中国宋明儒学だけではなく朝鮮朱子学者の李退渓研究があるが，和合学を形成する過程で日本人学者ともしばしば交流し

ている。儒学に関する国際学会会場での学術交流は言うまでもないことだが，早稲田大学，東京大学，京都大学，九州大学，福岡女学院短期大学等で学術講演を行っており，日本の宋明思想研究者や有識者と和合学に関する真摯な討議があったようである。和合学形成には戦後日本の儒学研究が間接的にしろ反映しているようである。そうだとすれば，和合学研究を通じて，日本における中国思想の研究方法を見直す契機を見いだすチャンスではなかろうか，これも私の和合学研究の動機の１つである。

（５）1996年12月，『和合学概論―21世紀文化戦略の構想』が刊行されて以後，中国では新哲学の誕生に大きな反響があり，批評や紹介文が多く公刊された。それについては，拙著「21世紀の中国哲学　張立文の和合学」（『福岡女学院大学紀要』第９号）にその一部を記述しているので，それを参照していただきたい。日本では専門家の間で和合学の名称は知っていても，本書が中国関係書店への入荷が遅れたこともあって，出版後の２～３年間は本書の存在や内容を知っている人は希有であった。

日本のこのような状況を知り，私は張立文先生の同意を得て，和合学の原論部分に当たる「第２章　和合と和合学(1)和合の釈義，(2)和合学意蘊，(3)伝統和合方式の坎陥，(4)和合思惟と意義」を翻訳し，簡単な解説を附して『福岡女学院大学紀要』第９号から12号までに連載した。

又その間，早くから和合学に注目されていた将来世代総合研究所の矢崎勝彦理事長と金泰昌所長の要請によって，「和」に関する北京シンポジュームにおける張立文のレジュメ「和合学要綱」を翻訳した。さらに，前記の一連の京都フォーラム・将来世代総合研究所主催の「和」に関するシンポジュームに出席させていただき，和合学の現代的意義や有効性を再認識する機会を得た。

（６）以上，上記の作業を通じて和合学を理解するためには，『易経』『論語』『大学』『中庸』や宋明儒学の基礎知識が必要であることを痛感した。そこで，本論稿では，中国古典と和合学との関連を考察して和合学の特徴を検討したい。

閑話休題，和合学による気功―「和合功」の理念を紹介しておく。2000年10

月に朱子生誕870周年・逝去800年紀年国際学会に出席した際，その会場で張立文先生から手授されたものである。

和合功

1．　潜龍擺尾　現龍左右　合抱乾坤　明目在天

2．　天地健順　亀静動一　帯動水充　足陰完満

3．　内外絪縕　上下交感　陰陽貫通　天人合一

2．和合学の目的と使命

1990年代に入ってから本格的に和合学を探求してきた張立文は，『和合学概論―21世紀の文化戦略』「自序」において和合学を提唱した目的について，次のように述べている。

> 現代の三大挑戦に対する中国文化からの回答として私は，董仲舒の「三年，園を窺わず」という精神で，思いを尽くして「和合学」を考案した。
>
> 和合学はこの１世紀，中国伝統文化を現代化するために提起された種種の方法や手段に，それぞれの結実と安穏な場所を与えることができるであろう。
>
> 和合学が現代の三大挑戦を処理し解決するために，巨大で有効な活きた智慧を発揮することを期待している。

現代の三大挑戦とは何か。第一は人類共通の五大危機（①生態的危機，②社会的危機，③道徳的危機，④精神的危機，⑤文明の衝突危機）からの挑戦である。第二は，欧米に追いつけ追い越せという近代化によって受容された西洋文化一元主義からの挑戦である。第三は中国伝統文化の貴重な遺産を，如何にして五大危機の解消を担当できる新しい現代文化に，改造できるかという挑戦である。これら現代の三大挑戦に対抗し苦闘する中で大悟し形成されたのが，和合学であった。

先ず人類危機の原因である五大衝突を和合学はどのように解消するのか。張立文は，「和合学綱要」の中で五大危機が①人と自然の衝突，②人と社会の

衝突，③人と人との衝突，④人心内での衝突，⑤文明と文明との衝突から生起していることを指摘し，それらを具体的に列挙して分析した後，次のように提案している。以下，少し長いが「和合学綱要」から要約する。

その他にいろいろ複雑な衝突も存在しているが，大概この五大衝突と危機に分類することができる。人類のこの五大衝突を解消するには，和合学が最も素晴らしい文化的様式を選択しており，最も優れた価値的方向を指し示している。

①如何にして生態的危機を解消するか。それには，環境汚染や土地砂漠化を防止し，人口を計画的に管理し，資源の欠乏を解決し，疾病の危害を予防する。

②如何にして社会的危機を協調させるか。それには国際社会の南北の貧富の不均衡や東西発達のアンバランスによる衝突や，経済的困難を避けることを主とした新移民の波がもたらした緊張・衝突・暴力を解決する。さらに戦争・マフィア・テロ・政治腐敗・金権政治等を解決する。

③如何にして人と人との間の衝突を和諧（調和）させるか。道徳的な堕落・行為の逸脱・公然たる略奪・財産の奪取・生命の傷害，殺人や放火等を解決する。

④如何にして人心の精神的危機にバランスを与えるか。心の中の苦悶・苦痛・煩悩・焦慮・悲哀・憤怒・抑圧等のストレスを解消する。

⑤如何にして文明と文明との衝突を解消するか。相異る文明の間で対話させ理解させる。

人類が直面している五大衝突と危機に対して，これは人類共同の価値観や理念を構築する基礎となる。完全に一致する価値的理想，精神の世界・倫理道徳・究極の配慮は構築できないが，各民族・各国家間で最低限認められる規則・原則・原理および価値的観念は確立できる。

人間の直面している衝突と危機を解決できるかどうかに，各民族や各国家が注意力を集中すべきであるが，これは時代の要求であり時代の呼びかけである。

これを価値観の基準と指導理念として全ての文化を観察すれば，いわ

ゆる西洋文化と東洋文化の絶対的境界や優劣の区別を取り除き，さらに両極に分けられ固定化されている「伝統」と「現代」との差異を乗りこえることができるであろう。

人々がこのように視角を転換すれば，新しく衝突融合して和合する理念によって，人類が直面している衝突と危機の回避や解消を思考することができるようになるであろう。

張立文によれば，五大衝突や五大危機は人類的危機であって，特定の民族や国家が襲われた民族的国家的危機に限定できるものではない。各人はそれぞれの民族や国家という枠組みから自己を開放して,「人類共同の価値観や理念を構築する」という人類的立場に拠点を置き換えて，現代という「時代の要求であり時代の呼びかけ」に感覚を研ぎすまさねばならない。「人々がこのように視角を転換すれば，新しく衝突融合して和合する理念によって，人類が直面している衝突と危機の回避や解消を思考することができるようになるであろう」。この「衝突融合して和合する理念」を学問体系に構成したのが和合学である。

それ故に,「人類が直面している五大衝突と危機に対して，これ（和合学）は人類共同の価値観や理念を構築する基礎となる」。そして,「和合学を価値観の基準と指導理念として全ての文化を観察すれば，いわゆる西洋文化と東洋文化の絶対的境界や優劣の区別を取り除き，さらに両極に分けられ固定化されている伝統と現代との差異を乗りこえることができるであろう」と現代の二大挑戦問題である西洋文化と東洋文化を隔絶している偏見差別，及び伝統文化と現代文化を分断している障害を乗り越える理論思想を構築することができると言うのである。そのような課題と使命を背負って誕生したのが，和合学である。

張立文は現代の歴史的課題を「三大挑戦」と認識し，それを根本的に解決する文化的基礎を構築したものが，和合学であった。実は『和合学概論—21世紀の文化戦略』を書き上げた張立文は内蔵の大手術のため入院している。文字通り献身的努力によって和合学は誕生したのである。それまでして張立文は何故，和合学を提唱しなければならなかったのか。彼によれば,「現代の

三大挑戦に対する中国文化からの回答」であり，「五大衝突と危機が有効的に解消できなければ，人類には破滅しかない」という認識から来る人類愛と危機回避の道義的責任意識，つまり先憂後楽意識から来るものであろうが，もう１つの理由は中国哲学者としての使命感ではなかろうか。私は，そこに宋明儒学―特に朱子学の道統意識に似たものを感じる。道統意識とは，その学脈を担当している最先端の当事者として生きる覚悟であり，次世代への継承者を育成する自覚である。張立文が最も力を尽くして研究してきたのは道統意識の覚醒から，宋学を集大成した朱子学である。

> 中国史上，宋大思想家は唐末五代の社会的大動乱によって無秩序になった現実からの挑戦に直面し，またインドからの外来仏教文化が不断に社会の底辺まで深く進入してきた所の挑戦や，土着の道教文化からの挑戦に直面していた。…しかし，当時は三大挑戦に対する効果的な応答もなければ，新理論や新学説を体系立てることもなかった。やがて，程頤が登場して，「吾が学は受くる（継承した）所ありと雖も，天理の二字は却ってこれ自家体貼し出で来る」と提示した。それ以来，この「自家体貼（自己自身の体認）し出で来る」の「理」が，…宋明理学の新時代を切り開いた。　（『和合学概論―21世紀文化戦略の構想』自序）

①門閥貴族社会から士大夫社会への大転換期における無秩序社会の大動乱②「我」の絶対自由を基調とした外来仏教文化受容の行き詰まりによる放縦自恣の横行③生命尊重を絶対化する道教文化による個人主義の蔓延等の「三大挑戦」をどのように克服するかが，宋代の学者たちに提出された「時代の要求であり呼びかけ」であった。この課題超克に取り組んだ朱熹は，当時の学問を集大成することによって朱子学を形成したのである。朱子学の思想史的意義をこのように把握すれば，現代の「三大挑戦」に正面から向き合ってこれを超克せんとすることは，朱子学の現代化と言えるであろう。

> 筆者（張立文）の中国哲学論理構造論，伝統学，新人間学等の模索は，中国伝統哲学を超越する試みであり，それは中国文化の精神や活きた智

慧や人間的感情を敷延し継続したものである。　　（『同上』同上）

画竜点睛，中国古典哲学研究に魂を入れるには，現代の「三大挑戦」打開に実践的に取り組んで新機軸の中国哲学を創造することである。張立文は，「三大挑戦に応じる最も優れた文化的選択が，和合学である」と宣言している。

中国の伝統文化を如何にして現代化するか。ここ１世紀以来，中国人は相次いで実践を重ねてきただけではなく，いろいろな主張やアイデアを提起してきた。例えば中体西用・西体中用・中西相互体用・中西を体とし中西を用とする説等，抽象的継承・選択的継承・広角的継承・具体的形象等，創造的転化・創造的解釈・総合創新論等，及び全面的西洋化・儒学第三期発展・儒学復興説等がそれである。これらの論説は皆，どのように現代化するかという方法や手段についての模索であった。これらの模索は，さらに多くのいろいろな方法を提起できるであろうが，しかし未だに新しい理論や学説を提示するには至っていない。（『同上』同上）

近代以降，多くの中国哲学者が西洋文化の受容と超克をめぐって苦心惨憺してきた上記の思想的営為を踏襲して，これらを集大成したのが和合学である。張立文自身，「和合学はこの１世紀，中国伝統文化を現代化するために提起された種種の方法や手段に，それぞれの結実とそれに相応（ふさわ）しい落ちつき場所を与えることができるであろう」と語っているが，このようにして，和合学は成立したのである。

「融突して和合する」，これは人類が共同に直面している五大衝突を解消することに対して大きな魅力を持っている。また，西洋文化の挑戦に応対することに対して強大なエネルギー（生命力）を持っている。伝統文化の現代化に対しても内発的駆動力になる。和合学でなければ，人類が直面している五大衝突を合理的に道徳的に審美的に解決することはできないであろう。又それは，創造的に東洋と西洋との文化的価値の和合を成就し，現代文化の転換を解決することができ，中国文化を斬新な容貌

にととのえて世界に立ち向かわせることができるであろう。

（『同上』同上）

3．衝突―融合―和合，「融突論」

張立文は和合学の取り扱うべき研究対象を次のように説明している。

和合学とは，自然・社会・人と人との間・人間自身の心や文明間の中に存在している和合現象を研究対象とするものであるが，和合の意味と理論をよりどころにして，衝突と融合を包括しながら，しかも衝突や融合のレベルを超越せんとする学問である。

和合は宇宙間の普遍的現象である。故に，それが和合学の研究対象とされる。全ての存在には衝突が含まれている。例えば大きいものでは日月星辰，小さいものでは草木螻蟻に至るまで，それらは，いずれも「融突和合」の存在である。

和合宇宙の構造様式は，無数の自性関係，本質関係，変化関係，過程関係，芸術関係を総合したものである。例えば「乾道変化して，各（おのお）の性命を正し，太和を保合す」（『易経』乾・彖伝）。宇宙間の万事万物は天道の変化に依り循（したが）って各自に自性・本質・運命を賦与されて，それぞれの存在として定立されている。これらはそれぞれが分殊しており，差異があり，衝突するが，また内外の「太和」を保持していると説かれている。

「太和」は，即ち最大の和であり，つまり和合である。和合はあらゆる所に存在しており，「融突存在」のすべては和合存在である。これらが，つまり和合学が研究対象としているものである。

（『和合学概論―21世紀文化戦略の構想』第2章2和合学の真義）

要約すれば，「和合は宇宙間の普遍的現象である。故にそれが和合学の研究対象とされる。」「それらは，いずれも『融突和合』の存在である。」「和合はあらゆる所に存在しており，『融突存在』のすべては和合存在である。」と言えるであろう。

和合学の中には，張立文の独創的な用語が頻出する。ここで使用されている「融突和合」「融突存在」「和合存在」等も独自の概念である。そもそもこの「和合」が内包している意味からして，張立文が中国古典を再解釈して独創した新しい内容をもっている概念であろう。「和合」「融突和合」「融突存在」「和合存在」等の概念内容を検討し，理解しなければ，和合学へは入門できないであろう。

宇宙とは「往古来今，これを宙と謂う。四方上下，これを宇と謂う」（『淮南子』斉俗訓）と解釈されているように，宇は無限の空間，宙は無限の時間である。その宇宙間に存在するありとあらゆる現象は和合である，と言う。「和合」とは如何なる現象か。

> 和合の「和」は調和・平和・和睦・和楽・祥和であり，「合」は結合・連合・融合・合作である。
>
> （「和合学要綱」2　和合人文精神の本義）

> 和合とは，①自然，社会，人と人との関係，こころ（心霊），文明のなかの多くの元素や要素が相互に衝突し融合する。そしてまた②その衝突や融合の動態的過程を通じて，それぞれの元素や要素が和合して新しい構造様式や新しい事物，更には新しい生命となる。その①と②とを包括した概念である。
>
> （『和合学概論—21世紀文化戦略の構想』第2章1和合の釈義）

> 和合は，差異のある元素や要素・材料が多元的に和合しあって，「生生」しているのである。ここで言う「生」とは，新しい生命和合者が存在すると言うことである。
>
> 差異のある多様な元素や要素・材料が和合しなければ，新しい生命や新しい事物へと変化することはできないし，新陳代謝されて古いものを吐き出し，新しいものを吸収することもできない。和合があって，はじめて変異があり，新しい生命や新しい事物へと変化するのである。故に和合は，新しい生命や新しい事物が和合者として存在する，その理由で

あり根拠である。　　（『同上』同上）

生命のあるものや流動変化する事物は，衝突―融合―和合と展開する。張立文によれば，この衝突―融合―和合のそれぞれの関係は次のようである。

衝突は融合の原因となり，融合は衝突の結果である。衝突は融合の前提であり，融合は衝突の必然である。

人類が生存している各種不同の面においては，それぞれのランクで異なった衝突融合のタイプが存在しており，あらゆる類型の衝突融合を一括できる抽象的概念はない。現在，人類は五大衝突と危機に直面している。如何にしてこの五大衝突と危機を解消するかは，人類の文化・生命のあり方にかかっており，その時代の人文精神の精髄と言える。これこそ，衝突融合のより高次なランクであり，即ちそれが和合である。

和合には衝突と融合とが含まれている。衝突融合の和合体は一種の昇華であって，もともとの衝突融合を新しい領域や境地へ進入させていくものである。衝突は，新しい和合体の中でのみ，継続発展して価値を獲得することができるのである。衝突がもし融合に帰着しなければ，その衝突は衝突のための衝突でマイナス的な価値と意味しか持たないであろう。故に衝突は融合によって肯定され(自己実現され)，認可される必要がある。

融合もまた，もし衝突がなければ融合ということもないであろうから，融合のプラス的な価値や意味もなくなるであろう。

衝突は生命の活動であり，融合も生命の活動である。「融突」の和合体は，生命の活動体である。和合は即ち衝突であり融合であり，超越であり内在である。　　（「和合学要綱」2　和合人文精神の本義）

衝突は，漸次に変化していく過程である。たとえ激烈な衝突であっても，新しい構造様式が形成されるまでは，漸次に変化していく過程である。融合は，瞬間に変化する過程であって，新しい構造様式が融合の中で構成される過程である。和合は，超越という意味の変化で

ある。即ち超越である。

和合は，衝突と融合でありながら，また衝突と融合ではない。和合は，衝突でありながら融合でもあり，衝突でも融合でもないのである。和合は衝突融合に対する超越である。

（『和合学概論—21世紀文化戦略の構想』第2章1　和合の釈義）

このように張立文の衝突—融合—和合の関係についての理論においては，和合が衝突や融合の過程からは超越した一層高次のレベルで相対的独自性を保っている。和合は，その衝突や融合のそれぞれが固有している具体的で特殊な価値や意義を，「融突の和合体」という新しいレベルの世界で見直し，ポジティブに位置づけ直して蘇生させる。このような関係についての理論を，「融突論」と呼んでいる。張立文は和合に五つの意味（①差異と和生，②存相と式能，③衝突と融合，④劣の淘汰と優の選択，⑤煩悩と和楽）を認識し，これらを「融突論」によって次のように理解している。詳細は別稿を参照していただくとして，ここでは結論だけを紹介しておく。

和合の五つの意味には，いずれも「融突」の理論が含まれている。即ち融合衝突の関係についての理論である。これを簡略化して「融突論」と称す。差異—存相—衝突—劣の淘汰—煩悩＝突であり，和生—式能—融合—優の選択—和楽＝融である。融突が進めば，即ち和合である。和合のこの五つの意味は，即ち和合の意味の内在的動態の構造様式である。

和合の第一の意味は，「自性」を有することである。「自性」があれば「生生」できるのである。差異があって和生することは，生命が生生する根本である。

第二の意味は，本質を有することである。本質を有すれば，形式がある。「存相（存在しているものの様相＜あり方＞）」と「式能（存在の様相＜あり方＞を決定する型式や潜在的能力）」は日々変化して新しくなる根本である。

第三の意味は，変化できるからこそ超越できる。衝突して融合することは「大化流行」の根本である。

第四の意味は，過程を有することである。過程を有することによって，「真切」なることができる。劣の淘汰と優の選択が「対称整（統又は総）合」の根本である。

第五の意味は，芸術性を有することである。芸術性を有すれば，美感を存する。煩悩と和楽は「中和」的審美の根本である。

生命が生生し，変化が日々新しくなり，大化が流行し，対称し整合し，中和し審美することは和合の人文精神の原則である。

差異ある「和生」の絪縕原理，「存相」と「式能」の選択原理，衝突と融合の変化原理，劣の淘汰と優の選択の連動原理，煩悩と和楽の中和原理，それらは和合論の五大原理である。

これが融突「和合論」の基本内容である。原則と原理は事物が変化し転換する過程の中において必然性をもったものである。事物の展開過程における筋道と方向性がそれによって規定される。

（「和合学要綱」2　和合人文精神の本義）

上記，張立文の「融突論」（「和合論」）を考察するに当たって，中国伝統思想の「生生」（参照，上記の「和合は，差異のある元素や要素・材料が多元的に和合しあって『生生』しているのである。ここで言う『生』とは，新しい生命和合者が存在すると言うことである。」）と「和と同」（参照，上記の「差異のある多様な元素や要素・材料が和合しなければ，新しい生命や新しい事物へと変化することはできないし，新陳代謝されて古いものを吐き出し，新しいものを吸収することもできない。」）及び「中和」は無視できないと思われる。融突論や和合学形成の底流には，中国古典―特に宋明儒学における「生生」「和と同」「中と和」に対する思想的伝統遺産が批判的に現代化されてではあるが，かなり濃厚に継承されているように感じるからである。

4．和合と「生生」「和と同」

（1）和合と「生生」について

張立文は「生生」を「創造」と対比する概念と理解している。「造物主（神）によって創造された世界」と考える西洋思想と比較して，中国思想では「(万物の）和合によって生生する世界」であると認識している。

和合は生生であり，和生・合生と言うことができる。その理論は，衝突（差異）―融合（絪縕）―和合（和合体）と認識されている。

和合という概念は，『国語』鄭語に初めて「商の契は能く五教を和合し，以て百姓を保(やしな)ふ者なり」と出ている。秦の時代には「和同の弁」があった。『管子』や『墨子』には「和合」と述べ，仏教には「因縁和合」，道教の『太平経』にも「和合」と記述されており，その故に民間では「和」と「合」の２人の仙人がいることになっている。天地間の万事万物はすべて「和」と「合」によって和合なるものがある。和合がなければ，存在は非存在になり，非存在から存在に転換するには必ず和合を待たなければならない。　（「和合学要綱」２　和合人文精神の本義）

中国には，西洋のような普遍的に認められている（造物主である）上帝や天神の創世紀説はなかった。そうだとすれば，宇宙万物は如何にして生まれたか。どうして生まれたか。最初は何処から来たか。これらのことについて，中国の思想家や哲学者は答えなければならない。

彼らは「仰いでは象を天に観，俯しては法を地に観，鳥獣の文と地の宜とを観，近くはこれを身に取り，遠くはこれを物に取る」（『易経』繫辞伝下）という観察法に従って，「以て万物の情を類（推）」（『同』同）したのである。　（「同上」２　同上）

中国古代の思想家が自分自身の観察と経験を通じて理解したことは，男女の媾合によってたくさんの子供が生まれたが，その新生児達の本質は（父母両性の）和合の中にあり，和合から離れたならば存在が無になる

ということであった。

そして，ここから天地万物の化育生生を類推していったのである。「天地絪縕として，万物化醇す。男女精を構(あわ)せて，万物化生す」(『易経』繫辞伝下)。この意味しているところは，(天地間の万物は) 天地・陰陽・男女等，各種の差異ある元素や要素の媾合であるということであろう。差異があって初めて変易があり，変易があって初めて媾合があり，媾合があって初めて万物の生成がある。

それは「天地が気を合して万物が自然に生じるのは，夫婦が気を合して子が生まれるようなものである」(漢　王充『論衡』自然篇)。天が陽で地が陰，男が陽で女が陰とは，漢代思想の共通認識であった。「陰陽が和すれば，則ち万物育す」(『同』宣漢篇)。陰と陽，女と男，妻と夫が和して合し，あるいは合して和し，万物を生育するのである。

このような多種多様で相互に差異があり，しかも対待している元素や要素が和合して物を生育するというのは，西洋の単一的唯一的な絶対的存在であって，対待するものがない在天の父なる神(上帝)が物を造るというのとは，その趣向が大いに異なっている。そこで筆者(張立文)はこのような神による創世の思惟と対待している思惟を，和合思惟と称するのである。神による創造は宗教へ導き，和合は理解へ導くのである。

(『和合学概論－21世紀文化戦略の構想』第2章1　和合の釈義)

「創造された世界」は，造物主に主体があり，被造物は客体である。人間も被造物であるから，個々人の価値は造物主によって評価され，自己の生き方も造物主との関係によって決定されるであろう。創造されたものは，必ず壊滅する。時間や空間も創造され賦与されたものであれば，有限であり相対的である。創世期から終末期へと定方向に進行する。いわゆる進歩史観の世界である。

それに対して，「生生する世界」には造物主がいない。和合によって生生された存在は，客体でありながら主体でもある。主体でありながら客体でもある。個々の存在は，生生する運行を推進する和合関係における主体者の役と客体者の役を同時に担当している。両者は双方向に関与し，対立し，作用し

合っているのである。和合論によれば，衝突し融合し，やがて和合しているのである。

例えば夫婦を例にすれば，自己（夫）と他者（妻）は差異（男と女）ある存在である。他者（妻）は自己（夫）との関係で言えば，相対的でありながら自己形成には欠くことのできない対照的存在であり，相互補完的存在である。自己（夫）は他者（妻）と衝突し融合し，めでたく和合（懐妊）すれば，そこには自己と他者を継承する新しい和合体（新生児）が生まれる。新しい和合体（新生児）は自己（父親）でもなく，他者（母親）でもない。それは新しい独立した存在（独自の人格者）であるが，自己（父親）と他者（母親）の元素や要素や素材（遺伝子）を継承した和合体（新生児）である。この新しい和合体（新生児）から見れば，自己（父親）も他者（母親）も一世代前（祖父母）の和合体（新生児）である。自己（夫）も和合体であり，他者（妻）も和合体であった。このように自己も他者も，類推すれば人も物もすべてが和合体である。「身体髪膚，これを父母に受く。敢えて毀傷せざるは，孝の始めなり」（『孝経』）とは，このような和合体である自己自身や他者の身体を尊重して保全し，将来世代へ継承せよとの意味であろう。

孝について付言しておきたい。今日の孝は，その主体と客体が相互に平等な基本的人権を有する独立した人格間で行われる行為であるから，子から父母へ，父母から子へと双方向に実行されるべきであろう。さらに言えば，孝の対象は先ず父母の和合体としての自己である。自己の身体髪膚を毀傷しないことが孝の実行で最優先されるべきことであろう。自己愛による自己実現を起点として，父母，近親者，地域の人々，人類，動植物，地球，宇宙へ，また現代世代から過去世代や将来世代へと，その対象が拡大されるべきであろう。

次に「生生する世界」の「生生」活動の特徴を時間や空間との関係で言えば，宇宙という無限の時間と空間の中で自己の内発性と外的環境の条件に限定されながら，進歩ではなく循環している。循環が「生生」の特徴であるが，いわゆる循環史観では，終末よりも過程（プロセス）が重要視されて，過程における随時随所の主客関係のあり方に価値が置かれる。

以上から，「創造された世界」と比較した場合の「生生する世界」の特徴が明らかになったと思うが，張立文は「和合を生生という意味での『自性（おの

ずからなる本性)』とすれば，和合は即ち生生である」「和合生生は，生生して息まない変化や新しい事物・新しい生命の生産を指している」(『和合学概論—21世紀文化戦略の構想』第2章1　和合の釈義）と述べて，生生の新陳代謝は和合が固有している本来の現象であることを確認している。

実はこの段落での張立文の主旨は，「衝突（差異）から和合（和合体）へ転換するのは，『交媾（合)』『絪縕』という仲介系統を通過しなければ実現できない」(『同上』同上）ことを指摘することであった。

> 和合を生生という意味での「自性（おのずからなる本性)」とすれば，和合は即ち生生であり，それは和生とか合生と言うことができる。その公式は，差異$\xleftrightarrow{\text{交媾}}$和生，差異$\xleftrightarrow{\text{絪縕}}$合生である。いかなる異質な元素も和生や合生へ転換するのは，いずれも『交媾（合)』『絪縕』という仲介系統を通過しなければ実現できないのである。和して生生，合して生生，和合して生生して息まないのである。
>
> (『和合学概論－21世紀文化戦略の構想』第2章1　和合の釈義)

戦争から平和へ，報復から和解へ転換するには，この「仲介系統」が重要である。敵対し対立しあって闘争している当事者間の衝突を回避し，両者の存亡の危機を回避するためには，第三者による「仲介」が不可欠である。第三者によって，衝突回避や危機解消の条件が具体的に整備され，衝突の根源的要因や素材を探求し，敵対する両者が融合して共存共栄の道を実現する。その処置能力は，衝突している両側を媒介する「仲介系統」の機能性やその力量によって決定されるが，衝突している両者とそれを仲介する媒介者の三者の関係が闊達円滑に機能するための現実的な理念やプロセス・システムの整備が重要である。衝突－融合－和合の構造を探求する和合学は，正にこの問題を課題として構築されたものであると言えるであろう。

張立文は，このような理念に基づいて，現前の具体的力として(1)権力集団の集団的な法的権限，(2)民生の世相（民衆）における個人の倫理と常識，(3)知的精神の理想主義を列挙している。詳細は別稿の拙訳を参照されたい。

さて，張立文は「和合学は，如何に生生するかについての理論的根拠を追究する学問である。…何故，衝突し融合して新しい事物や新しい構造様式を生生するのか。…また和合生生の生命力の源泉に対しても探求する。そのため，和合学は新生命哲学や新構造様式についての学説であり，即ち生生哲学である」(『同上』第2章2　和合学の真義) と指摘している。

和合学は生生哲学であり，「生生」「生生して息(や)まず」は和合学を理解するためのキーワードである。

生生は，『易経』繫辞伝上篇の「生生，これを易と謂う」を典拠とするが，朱子は，これを「陰は陽を生じ，陽は陰を生ず。その変は無窮なり」(『周易本義』巻3) と解釈している。生命やその活力を重視する宋明学は，これが宇宙や万物の根源であり，人間本来の生き方の根本を指示していると認識している。

例えば宋の程子は「生生これを易と謂う。これ天の道たる所以なり。天は只これ生を以て道となす。この生理を継ぐものは，即ちこれ善なり。善は便ち一個の元底(なるもの)の意志あり。元は善の長，万物には皆，春意あり。便ちこれこれを継ぐものは善なり。これを成すものは性なり。成すとは却ってその万物の自成を待って，その性須く得べし」(『二程全書』巻2) と解説している。また明の王陽明は，「仁はこれ造化生生して息(や)まざるの理なり」(『伝習録』上)「良知の体は，…本より生生なり」(『同』中)「良知は即ちこれ天植の霊根にして，自(おのず)から生生して息(や)まず」(『同』下) と，生生が仁や良知の活動作用であると理解しているのである。

張立文は，これらの新儒教や，道教が「生命の生生を否定せず，…長生不死の楽しみを展開させて，生きたままで仙人になる白日飛翔・羽化登仙を究極の境涯としている」のを，「中国文化の生生という思想の特殊性を体現したもの」(『和合学概論—21世紀文化戦略の構想』第2章2　和合学の真義) と理解して積極的に受容している。その上で，

> 生生は，天地間の最も基本的で，最も一般的な徳性である。天地は生を根本としており，生は天地間の普遍的原理である。「生生，これを易と謂う」。孔穎達の疏には，「生生は不絶の辞にして，陰陽転変し，后生の

前生を次ぐは，これ万物の恒生，これを易と謂うなり」とある。これは，天地間の生命に対する普遍的な関心と感興である。それは個体としての生命を超越しているだけではなく，さらに集合体としての生命をも超越している。その中で，普遍的生命の価値と生命のはたらきを尊重する中国文化の態度が育成されているのである。

（『和合学概論—21世紀文化戦略の構想』第2章2　和合学の真義）

生生は，流行して息(や)まざる過程である。新生命の誕生生育であり，中国文化人文精神の精華である。

先哲達は内在している生命力と外在の環境変化とが相互に交錯し織りなす深い体験を蓄積するなかで，人の生命の尊厳や価値と意義を体悟し，生命が生生する活力や，真・善・美の境地における快楽に対して，深い感動を発露し，そこで生を楽しいと認識している。生の「然(しか)る所以」は，それ自身が和合や合和であるからである。「天地の合和は，生の大経なり」（『呂氏春秋』有始）。

和合学は，如何に生生するかを追究するものである。つまり和合して生生する，その生命力の源泉に対する探求である。故に和合学はまた新生命に関する哲学であり，生生哲学である。

（「和合学要綱」2　和合人文精神の本義）

と，解釈している。参考のために，「生生という語の後ろの生の字には変易の意味が含まれている」（「同上」同上）という張立文の解を付言しておく。

（2）和合と「和と同」について

宇宙の現象は生生する和合であり，それは和合体の（衝突—融合）—和合である。（衝突—融合）をカッコで囲んで表現したのは，（衝突—融合）と和合との間に「超越」があるからである。和合体が和合することは，生生する主体が主体本来のあり方へ復したと言えるであろう。『論語』の「克己復礼」である。和合体が衝突し融合して，古い礼（ルールや制度）から新しい礼（ルールや制度）へ変わる。朱子学によれば，「礼は，天理の節文，人事の儀則なり」

である。天理も人事も古い「節文や儀則」から新しいそれに変革され移行する。それに連動して，和合体もその本質を古いものから新しいものへ新陳代謝して生まれ変わるのである。和合体は，（衝突―融合）を経るごとに一層一層，一段一段，和合体の本来性へ近づき，自己自身の和合に復し，新しい自己へ変革していくのである。

『論語』学而篇には，「有子曰，礼之用和為貴。先王之道斯為美，小大由之。有所不行，知和而和，不以礼節之，亦不可行也」とある。古来，この章はそれぞれの解釈によって訓読のしかたが数種類あり，例えば冒頭の「礼之用和為貴」を「礼はこれ和を用って貴しと為す」とか，「礼の用は，和を貴しと為す」と訓読するとか等がその代表であろうが，この章が礼と和との関係を論じていることは異論のないところであろう。

朱子の解釈によれば，「有子曰く，礼の用は，和を貴しと為す。先王の道は，斯れを美と為し，小大これに由る。行はれざる所あれば，和を知りて和すれども，礼を以てこれを節せざれば，亦た行ふべからざるなり」と訓読できる。礼の作用（はたらき）が和であると認識している。「和は，従容（しょうよう）として迫らざるなり」。そこで，「礼の体（本体）たるは厳なりと雖も，然れども皆自然の理に出ず。故にその用（作用）たるは必ず従容（しょうよう）として迫らざるなり。乃ち貴ぶべしと為す」と体用論で解釈している。

問題は，この章の後段である。「行はれざる所あれば，和を知りて和すれども，礼を以てこれを節せざれば，亦た行ふべからざるなり」。何故，礼が実行できなくなるのか。そして，重要なことは，どうすれば礼が有効に機能する状況へ変革できるかである。朱子は，「愚（朱子）謂（おも）へらく，厳にして泰，和にして節，これは理の自然，礼の全体なり。毫釐も差あれば，則ちその中正を失いて，各の一偏に倚る。それ行うべからざること，均し」（『論語集註』の本章註）と洞察している。また，礼は厳しく実行され，和は楽しいものであるが，実はそれが「中正を失う」と，とたんに礼は抑圧牽強に暴走し，和は放蕩自恣に流れる。このように，礼が実践される際に，礼が固有している深刻な病弊に対して警戒している。「礼の用には，自然に和の意あり」「礼はこれ厳敬の意なり。…和はこれ別にこの和を討（たず）ね来らず。只だ厳敬の中に就いて，理に順って安泰なるものは，便ちこれなり」（以上，『朱子語類』巻22）。それで

は，どのようにして「厳にして泰，和にして節」の中正を得ることができるのであろうか。12世紀の中国で，この難題に挑戦した朱子は当時の儒仏・心性・体用・未発已発論争に決着を着け，居敬究理という独自の境界からそれらの思想を集大成して，回答した。これが朱子学の誕生であった。

戦争と革命の20世紀，近代化と伝統文化の衝突と融合，その中で朱子学を研究してきた張立文は，現代の五大危機から人類を回避するために，五大衝突の解消に挑戦している。テロと報復戦争で幕を開いた21世紀，人類は地球的規模で「中正」の道をどのように実現するのか。この重要課題を達成するために，和合論の衝突―融合―和合によって，中国伝統思想の中の「和と同」「中と和」は，どのように新しく再構築されるであろうか。

『論語』子路篇に，「子曰く，君子は和すれども，同ぜず。小人は同ずるも，和せず」という有名な章がある。朱子は，その章の註に「尹氏曰く，君子は義を尚ぶ。故に同ぜざることあり。小人は利を尚ぶ。安んぞ得るも和せんや」の説を紹介し，「和は乖戻なきの心なり。同は阿比あるの意なり。」と解説している。このように和と同とは対比した概念であるが，『国語』鄭語篇には「和は実に（あるいは「実すれば」とも訓読できるか）物を生じ，同なれば則ち継がず」と，和と同との比較が記録されている。これによれば，陰陽五行や男女等のように異質差異あるものの交際（交媾）による和は，生産的であり次世代への継承性をもっている。これに対して同は，同一のものの交際（交媾）であるから生産性がなく，継承性がない。張立文は，この『国語』鄭語篇に注目した上で，次のような見解を述べている。

> 和合は，人の精神生活中の煩悩，焦慮，孤独，空虚等の衝突を協調し和諧（ハーモニー）させて，情操を陶冶し心を浄化する。人が和すれば天が和し，人が合すれば天が合し，さらに人が楽しめば天が楽しむ（『荘子』天道篇）と言われる和合の心の境地は，実は美感的で芸術的な境地である。
>
> 和合を美感的境地とすれば，和合は一種の芸術であり，それを和楽と呼ぶことができるであろう。和して合し，合して和す，あるいは和合や合和，そのどちらも不同・衝突・差異があってのことであり，一律・独

尊・独断を否定する，即ち「和すれども，同ぜず」である。それが衝突し融合して，和合する和合体を構成するのである。

この和合体は，美しい交響楽のようである。交響楽にはいろいろな楽器がそろって，さまざまな音色を奏でる。それらに相異があるからこそ，そのハーモニーや深い味わい，高度な芸術性によって，人々が感受した自然，社会，人生，心の内面の真諦を表現することができるし，人々に美的感動を与えることができるのである。また，たとえ一種類の楽器による独奏の場合でも，楽器と楽譜と教養が熟練された演奏者と組み合わされたり，この楽器の奏でる高低，遅速，緩急等の相異なる音律の融合によって，「六律を和して以て耳を聡(さと)くす」(『国語』鄭語)。こうしてこそ美しい曲が完成されるのである。

もし一つの楽器が出した音が騒音でしかないならば,「声は一に聴くことなし」(『同』同) である。それは聴かないだけでなく，人々の心を乱し悩ませ，思いもかけない乱暴や暴行に走らせるかも知れない。

和声，合声，和楽，合楽だけが，人々に美的感動や心の愉悦，情操の陶冶を与えて，人々に心のバランスや思慮の安定をもたらすことができるのである。

(『和合学概論—21世紀文化戦略の構想』第２章１　和合の釈義)

５．和合学の実践

五大衝突による五大危機の設定は，張立文の現状認識から来る。この五大危機を解消するために,「融突論」の和合観念に基づいて,「和生」「和処」「和立」「和達」「和愛」の五大中心原理が提起されている。和処は和生に達する基礎と必要条件であり，和立は和達に基づいている。そして，和生・和処・和立・和達の基礎と核心は和愛である。このように五大中心原理は有機的関連をもっているが，以下，参考のために「和合学要綱」から概要を抜粋しておく。

１）和生原理

人々が相互に依存して生存するかぎり，生物共同体を大切にし，異文化の

人々の共同体を尊重しなければならない。和生原則は，人類の相互依存性と相互連動性を意識的に発展させた和諧的（ハーモニーのある）生存様式である。和生は，剝奪を排斥するが，競争は拒絶しない。和生における競争は適者をより強くさせ，不適者も徐々に適応力と競争力とを強くさせる。だから，和生原則のもとにある競争は，新しい生命・新しい境地の現れを意味し，共同発展と共同繁栄を目指すものである。

2）和処原理

和処は寛容・温和・善良な態度で，自然・社会・他人・異文明とこころ（心霊）に対処し，双方あるいは多方を平和に共存させる。和生の発生およびその実現には和処が求められる。和処の責任意識は，他人から我々自身が親切にしてもらいたいように，我々自身が他人に親切にする責任意識である。自己の信仰・規範や価値観を堅持すると同時に，自己と異なるかまたは全く異なる他人の信仰・規範や価値観の存在も認める。和処原則の強調している責任は，双方的であり相互連動的である。和処原則は，交際と交流を重視するが，交際中の「中和」をより強調する。

3）和立原理

和立原理というのは，消極的な面から言えば，「己の欲せざる所，人に施すことなかれ」であり，積極的な面から言えば「己立たんと欲して，人を立てよ」である。例えば，それぞれの文化・民族および個人個人は自身の消滅を希望しないので，異文化・異民族・他人も消滅させてはいけない。それどころか，我々には「己立たんと欲して，人を立てよ」「己の欲する所，人に施せ」の精神が必要である。開放的寛容的な態度で他者を受けいれ，他者を保護し扶助して他者なりの生存方法や発展様式によって生育させることである。和立が強調しているのは，「自分が主宰となる」という精神であり，それは主体意識を突出させたもので，つまり自己の運命と発展を自己決定するというものである。

和立の原則は，現実の多様性・多元性に基づいている。世界の多極性・多様性があるからこそ，多様的多元的な文化交流と相互補完が可能であり，多様的多元的な和生・和処・和立を生み出すことができるのである。

4）和達原理

和立は，和達に基づいている。人と自然・社会・他人・異文明とは共同発達する必要があり，そうすべきである。これが和達である。和達は，当面の世界の多極化・経済的グローバル化・発展モデルの多元化が融突の中で協調し，バランスを取り，和諧し，共同発達に達する。これが孔子が「己達せんと欲して，人を達せよ」と述べている「人を達せよ」の現代版である。

5）和愛原理

和生・和処・和立・和達の基礎と核心は，和愛である。和愛は，人が他人・他家・他国に対しても自己・自家・自国のように愛し，大きく言えば自然・社会・文明に対しても人間を愛するように愛することである。言い換えれば，人類生存の第一義は人類が愛について理解し，愛について学び，愛し愛されることである。これが孔子の述べている「泛(ひろ)く衆を愛す」，墨子の論じた「兼ね相い愛す」等の古典的な智慧の現代的解釈である。

愛がなければ，衝突を解消しようとしても，できないだろう。現実社会においては，愛にも差別がある。しかし，和愛即ち相互愛は，愛し合うことを積極的に提唱し，愛の世界を広げるために努力することを求める。和愛がなければ，人類社会は荒涼とした砂漠となり，種々雑多な非理性的行為や不公平不義的行為が大量に行われる。結果的には戦争や人類の破滅に至るしかないであろう。

最後に，和合学の幸福論とも言うべき「中和」に対する張立文の見解を考察しておきたい。張立文は，「如何にして人間の精神生活の中での煩悩・焦慮・孤独・苦痛・苦悶等の衝突を協調させ和諧させて，和楽や愉悦を得るのか。それには，差異・衝突を認めた上で，いろいろな関係を処理すべきである」と発問し，それらの衝突を融合する処方箋を「和」と「中和」の審美的価値に求めている。張立文は，儒教・道家・墨家等の「和」と「中和」に関する文献を分析した後，「中和が審美の対象としての価値を担うには，主体の実践と感受によらなければならない。主体の感受や実践活動がなければ，中和の美は潜在的能力の様式に過ぎない」と体得している。そして，「情感と情緒には質的差異はなく，量的区分だけである」(『人性論』)というデビッド・ヒュームの説を援用して，『中庸』の「中と和」を次のように解析している。

中と和とは相関的概念である。和は，いろいろな元素や要素が相対的でありながら，相互補完的な関係にあって，対待する和諧である。中は，和の対待する和諧のなかで過不及や不偏不倚のない様式である。即ちある種の「度」の観念である。

「喜怒哀楽の未発，これを中と謂ふ。発して皆節に中る，これを和と謂ふ。中なる者は天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。中和を致せば，天地位し，万物育す」(『中庸章句』第１章)

人の喜怒哀楽の情緒は，外部からの刺激と内面の変化による反応であり，これは生理的機能とかかわる体感であり，本能の直接的表現である。…情感は道徳的心理の深層であり，平穏で安定した気質であるが，それは人が意識的に生理や心理の変化をコントロールして獲得する心理的機能であり，喜怒哀楽がまだ発動していない時の心理状態であると理解しても良い。喜怒哀楽が発動したとたんに，それは情緒となる。

もし発動して過不及なく節度に合すれば，それが中和である。中和によって，「天地を位し，万物を育す」という存在論にまで推し及ぶのである。　(『和合学概論－21世紀文化戦略の構想』第２章２　和合学の真義)

和合学によって，新しい「礼」の構築は可能であろうか。